思いやりのある社会

山梨学院中学校二年　内田　椎梛

「生理」とは、女性が必ず経験するもの。個人差はあるけれど、中学生のほとんどが既に初経を迎えている。私は、生理について社会はもっと考えるべきだと思う。昔と比べると、社会の月経への理解は高まったと言われている。しかし、それでもまだ理解が十分ではないのではないかと私は思う。

私は普段、生理のときは腹痛を和らげるためにお腹を丸めるようにして座ることが多いのだが、学校でもそのような座り方をしていた時、男性に

「怠けるな。」

と言われたことがある。だけど、痛み止めを飲んでもすぐに効くわけでもないし、保健室にずっといるわけにもいかない。かといって、そんな座り方をする以外に簡単に痛みを和らげる方法も分からないのだ。それに、学校を休んだとき、父に

「テレビ番組をリアルタイムで見たいから休んだの？」

と言われたこともある。しかし、私は生理痛が酷かったため休んだのである。

こんなことを言うのは、男性だけでない。女性でも、まれに言う人がいる。生理痛がずっと収まらず、体育の授業を連続で休んだときだった。ある一人の女性に

「サボってるの？」

と言われたことがあった。正直、男性よりも女性に言われる方がショックが大きい。

けれど、自分が「生理だ」と伝えていないのに、「察してください」なんて無理な話である。

それでも、“生理だと言いにくい”というのが本音である。

小学生のとき、学校で女子だけ残って生理について色々と教えられたことがあった。“女子だけ残って”である。男子には知られてはいけないものだとでもいうように、生理について話されたときは、決まって男子がいないところだったのである。多くの女性は、こういうことの積み重ねによって、“生理は男性に知られてはいけないもの”だという潜在意識が生まれるのではないか。例えば、クラス替えの前日に、友人とこんな会話をしたことがある。

「担任の先生は、女性の方が安心だよね。」

「うん。生理で行事を休みたいときとか、男性の先生では言いにくいもんね。」
　この“言いにくい”がどんな思いから来ているのかと言うと、“恥ずかしい”や“言っても分かってくれないだろう”という思いからである。
　仕事では、「生理休暇」というものがある。「生理休暇」とは、生理による体調不良で働くことが難しいときに、休みを取得できる制度のことである。しかし、
「生理と知られるのが恥ずかしい。」
「男性ばかりで申告しづらい。」
「ズル休みだと思われたくない。」
　などと思い、生理休暇を使わない人も多いようだ。
　教える機会がある時に男女関係なく全員にしっかりと教えなければ、自分から学ぼうとしない限り生理に関する知識は、男性なら尚更、ほとんどないのではないか。
　そして、私はここで一つ疑問に思うことがある。仕事で生理休暇があるのに、なぜ学校にはないのだろう。学校でも導入していいのではないか。中学生にもなれば、初経を迎えている女性の数は大人の女性とほぼ変わらないだろう。私は、生理休暇があれば痛くて辛い思いをしながら学校に行くことはなくなるのに、と思う。特に、体育祭と生理がかぶると本当に辛い。休まなくても良い結果を残せないし、休んでも何で休むのか問い詰められるのである。
　女性も男性も関係なく全員が早いうちから生理について学ぶ機会があれば、女性の生理についての悩みは少なくなるのではないか。また、男性の理解が十分でない社会でも、私たちが生理について話すことをオープンになってみたり、男性が少しでも理解しようとすることでも、少しは生活しやすくなるのではないか。
　私は、男性も女性も両方が思いやって、生活しやすい社会を作っていくのが大事だと思う。